
光を追い求める闇

青花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光を追い求める闇

【Nコード】

N77510

【作者名】

青花

【あらすじ】

少年は異質により忌み嫌われ、そして実父に殺された。しかし、少年が抱えていた闇は強大であり、また神にすら御しきれないものだった。故に神は選択する。新たな生命を紡ぐことによって。そして少年は新たな生を授かった。その身に宿す闇は大きく、また濃い。しかし少年は諦めない。自分を支えてくれる愛する存在が出来たら。自分を信じてくれた者の為に少年は槍を握る

0・始まりは運命（前書き）

気分的もう一個投下してみる。

一応『歩くロストログア製造機』を主に更新するので、こちらは亀更新になるかと。

0・始まりは運命

”呪われし忌子”　それが僕に対する周りの評価だった。
ただいるだけで周りの災厄を振りまく、何故存在するのかが理解
出来ない存在。

誰も彼もが僕を忌み嫌い、実の両親ですら僕を嫌った。

いや、嫌うだけならまだよかった。

彼らは僕を蹴る殴るなどの暴行、飯を与えない、水の中に無理矢
理顔をつける、挙げ句の果てにはマンションの3階から突き落とす
などの虐待を僕に与えた。

それに対する僕の反応は　無。それしか僕にはすることがなか
ったし、感情らしい感情も僕の中には存在していなかった。

故に両親はストレス発散の為、僕に暴行を加えた。

そんな僕を愛してくれたのは祖父ただ一人だった。

祖父は山奥で道場を開いて、そこに僅かながら訪れる門弟を鍛え
上げる毎日を過ごしていた。

僕が初めてその人と出会ったのは小学生にすらなっていなかった
頃。

偶々祖父が僕の両親の家に来て、そして僕の有様を見かけた。

それに激怒した祖父は両親を警察に突き出し、裁判に勝利し、そ
して親権を両親から奪い取り、僕を養子として引き取った。

そんなことがあっても僕には感情が現れることなく、それに対し
ての感想が「そうなんだ」の一言のみだった。

もしあの頃に戻れるのなら僕を叱りつけたい。

何故もつと感謝を伝えなかったのか。何故もつと愛情を伝えなか
ったのか。

そう思うがもう遅い。

あれから幾分と月日は経った。時間で現すと20年。僕が愛した祖父はこの世から去り、僕はまたしても一人となった。今では僕を支えるのなは、祖父が残したこの槍術のみ。免許皆伝すら貰ったが、これを磨くしか僕が僕であるということを示せない。

そして今度は僕がこの世から去る番らしい。

手に持つのは祖父の形見であった白い槍。それが今では血を浴び赤く染まっている。

その血の正体が僕の実父のもの。どうやら刑務所から脱走し僕に復讐をしに来たらしい。

僕もその可能性には失念していて、出会い頭に刃渡り30cmほどのナイフで一突き。僕の腹には風穴が空いている。

僕は限界になり地に伏せる。

僕を刺した父はもう既に事切れており、血溜まりの中に倒れ伏している。

頭の中に霞みが漂い、そろそろ僕も天に召されるらしい。

実父を殺したのだから地獄生きか、はたまたこの殺人は許されるのか。

僕としては

最後に眼に映ったものは、光り輝く星々だった。

爺さんにもう一度会いたいな。

「呪われし聖痕」を持ちながら”神殺しの神槍”ロングヌスを持つ者か。彼

の者にはもう一度生を受けて貰う他ないか……」

今し方現世より狭間に送られてきた人間を確認し、そう最高神は呟いた。

周りの天使たちもその採決には驚き、戸惑いを見せている。

「まさか」呪われし聖痕”がこのような場所で発現しているとは私のミスだ。この者には酷いことをしてしまった」

「オーデイン様っ!？」

「そして人間が作り上げ、そして神格を得た槍を手に行っているとは……、これも運命なのか」

宙に浮かぶ白い光を見て、最後の判断を下す。

「”呪われし聖痕”が発現したのなら、彼にはそれを掌握してもらう他はない」

そうして全てを司る最高神オーデインは彼の者を転生される準備へと入った。

手に持つは彼の者が操る神槍グングニル。それを術式媒体とし、魔法陣を構成する。

「彼の者よ。どうか次の生命イノチでは幸せに過ごしてくれ。運命がそうなることを拒んだとしても、彼の者にはそうするだけの力はあるのだから」

そうして白い光は輝き、そして収まった頃にはその光も消え失せた。

「オーデイン様、これでよろしかったのですか？」

「ああ。彼の者には幸せになって貰いたいの私の本心であり、こうする他なかったのも事実だ」

最高神はそう呟いて、そして姿を消した。

そして他の天使たちもまた、自分達の仕事に没頭し始めたのだった。

1・生誕 - Project SATAN -

ここは……

死んだ筈だというのに、自我と言うものは相変わらず生きていた。ここは死後の世界というところだろうか。いや、それにしては少し俗物的なものが多すぎる気もする。

というよりどこかの実験場？

自分の視点で辺りを見渡してみると、薄暗い部屋に生体ポッドみたいなものが数点。それに何に使われているのかわからない機械が所狭しと並んでいる。

そう言えば自分はどこにいるのだろうか。何故か水中にいるような感じがするが、息は苦しくない。

しかし、最後にいた場所は山奥の家。こんな実験場のような場所は記憶にはない。

「糞ッ！ ここもとうとう眼を付けられたようだぞッ！」

「どうするッ！？ 我等の悲願はもう完成間近なんだッ！ これさえ出来上がれば”紅き翼”なんていう英雄だろうが怖くないッ！」

「だが間に合うのか？ 報告からすると後数時間後にもここに辿り着らしい」

どうやらここの人間達が何かを話しあっているらしい。

我等の悲願？ 紅き翼？ 何のことかわからないが、どうやら彼らは英雄と呼ばれる立場の人間から追われているらしい。

それを考えると、どうやら彼らは普通の科学者ではなく、黒の科学者らしい。

この世界がどんな世界かは知らないが、英雄と呼ばれる存在が動

くほど、彼らは性根が腐った存在らしい。

ズズズ……ドンッ！ ドォーンッ！

「な、何だッ！？ 誰か報告しろッ！」

「ほ、報告ッ！ ”紅き翼” が攻め込んだできましたッ！ 現在第二ゲート、いえ第三ゲートも突破されましたッ！」

「何故だッ！ 報告ではまだ時間があつたというのに！」

どうやら件の英雄がここにやって来たようだ。

先ほどの揺れを顧みるに、英雄と呼ばれる存在達は少し過激な存在らしい。

「糞ッ！ 完成には少し至ってはいないが、問題はない筈だッ！

実験番号 X - 2 A 4 8 H N 9 B 6 6 6、識別名称 ”サタン” を起動するッ！」

「しかしッ！」

「ゴチャゴチャ五月蠅いッ！ どちらにしろこうする他存在しないのだッ！ もしこれが失敗だったとしても、この場さえ切り抜けられればもう一度実験は再起動出来るッ！ 今はどうやってこの危機を脱出するかが先だッ！」

どうやらここで実験していたナニカを起動するらしい。

未だ文句を言っている研究員もそれに納得したのか、その ”サタン” と呼ばれるものを起動する為に奔走する。

しかしそれと同じくして、先ほどから鳴り響く轟音も近づいてくる。これは英雄と呼ばれる存在達が鳴らしているのだろう。

そう言えば、先ほどからどうして僕の目の前をグルグルと周り続けているのだろうか。

よくよく見てみると、この水中は成体ポッドの一種らしく、色々なコードなどが接続されている。

それに伴い出てくる泡。これはナニカが呼吸している証拠であり、またその成体ポッドの中に呼吸出来るモノが存在している証。

そしてその成体ポッドから外を見ている存在は 僕？

まさか僕は生きているのだろうか？

いや、間違いなくあの時僕は死んだ筈だ。それは理解した。ならば生き返った？ いや、そんな早くに輪廻転生の輪に入って、生き返られるものだろうか。

いや、それ以前に生き返ったのなら、普通は病院に居る筈だ。ましてやこんな実験場みたいな場所にいる筈がない。

そんな疑問に頭を悩ましていると、どうやら研究員の方は準備が整ったようだ。

「実験番号X - 2 A 4 8 H N 9 B 6 6、識別名称”サタン”
起動しますっ！」

それらしい音はなく、ただ成体ポッドの扉が開き、その中に入っていた水みたいなのが流れ出す。

それと同時に僕の身体が外界に触れた。やはりこれは僕の身体らしい。

下を向くとやけに地面が近く、それに何も来ていない状態、つまり全裸だった。

鏡がないか探してみると、自分が出てきた成体ポッドのガラスに僕の姿が映っていた。

その姿は前世の姿の面影はなく、どういう理屈なのか理解出来ないが、ここは前居た世界とは違う世界だということを理解した。

それを理解した瞬間、様々な情報が頭の中を駆け巡る。

一般教養、武術、政治、科学、そして今までお伽噺の中にしか存在していなかった魔法。

様々な情報が頭を駆け巡り、外の喧騒など遮断され、今はこの膨大な知識をどうにかする他ない。

グッ……

激しい頭痛がするなか、この情報の海から欲しいものを探しだす。その中で確認出来たことだが、どうやらこの世界は元の世界とは違った世界らしい。

魔法というものが秘匿されてはいるが存在し、そして魔法世界というものが存在する。確かに旧世界と呼ばれる元居た世界に似た世界も存在するが、この魔法世界と呼ばれる世界が、僕にとってはお伽噺に出てくるような世界観だった。なんせ、文字通り魔法が存在し、竜などの架空の生き物が住まう世界。こんな世界、元いたところでは聞いたことがない。

どこだ……

知らない情報や有益な情報は見つかるが、今僕が探している情報が一向に見つからない。

もしこの身体が造られた身体なら、その情報がインプットされていないのかもしれない。いや、十中八九、この身体は造られた生命だろう。

だから何だと言うのだ。造られた生命？ 大いに結構。

人から生まれた生命だろうが造られた生命だろうが、そこにある差はほんの僅かでしかない。

折角の二度目の生なんだ。今度はもう少しマシな人生を歩もう。そうでなければ爺さんに悪い。

あれだけ忌み嫌われた僕を愛してくれた爺さん。

それなのに殺されてしまった。

それでは申し訳が立たない。

「……るのかッ!?」
「おーす、……しに来たぜ?」

頭痛も収まり、漸く外界の情報を取り入れることが出来る。
顔を上げてみると、そこには先ほどまではいなかった集団と、それに怯える研究者たち。そのトップに立っていたであろう人物が僕に命令を下す。

「サタンッ! 聞こえているのかッ! 早くあいつらを皆殺しにするッ!」

そんな命令が僕に届くが知ったことではない。
多分あの集団が英雄と呼ばれている”紅き翼”なのだろう。

先ほど手に入れた情報の中にもそのようなものがあつた。曰く、
世界を救った大英雄と。

「アル……、あの子は」
「どうやらここで造りだされた人工生命体のようですね。多分見つけた情報から察するに、彼がこの計画の大本命。悪魔の心臓を贄に生み出された究極の生命体」

どうやら思つた以上に僕は化け物みたいだ。
造りだされた生命だとは思っていたが、まさかそれに悪魔の心臓を使っているとは思つてもいなかった。

ということは僕は悪魔になるんだろうか。見た目は人間だが、多分スペック的には人間を遥かに超えているのだろう。
今でさえ漲る力は生前以上に感じらるのだから。

「酷え……」

「ええ。しかしおかしいですね。先ほどから彼は一切動いていないようですけど」

「おいッ！ 早くしろッ！」

「……五月蠅いよ」

「な……に？」

「だから五月蠅いって言ってるんだ？ 言葉は理解出来てるの？」

さつきから喚き散らして、まるで子供だね。しかもその内容が僕みたいなお子に人殺しをさせる？ 本当に屑だね。言いかえれば生きる価値がないって言うんだよ」

「き、キサマアアアアアアッ！」

僕の言葉にキレた研究員は何かを呟きだす。

「不味いッ！ 詠唱か！？」

紅き翼の一員、多分であるが近衛詠春が騒ぐ。

どうやらあれが魔法の詠唱らしい。

他にいるナギ・スプリングフィールドとアルビレオ・イマも少しだけ冷や汗を垂らしながら、どう対処しようか悩んでいた。

僕もどうしようか考えようとした瞬間、勝手に身体が動いた。

近くに置いてあったナイフみたいなものを手に取り、瞬時に詠唱をしている研究員の首元に接近。

それを見た研究員は驚きのあまり硬直するが、その一瞬で事足りた。

「ガッ……」

ナイフで首を一掻き。

頸動脈を切られたソレは、一瞬痙攣しつつ首から大量の血を噴出

して倒れた。

僕はそれを冷めた表情で見つめながら、これからの行動を考える。

どうやら殺すことについての観念は狂っているようで、今現在人を殺したと言うのに、一つの乱れも存在しなかった。

そういう風に造られたのか、それとも一度”死”ということを経験したからなのかはわからないが、どうしようもないことでもあった。

周りの人間達はその行動に凍りつきながら、誰一人として言葉を発せずにいる。

研究員達はトップが殺されたことと、自分達が造り上げた生命に反抗された動揺。

紅き翼達は造り上げられた生命がまさか反抗するとは思っても居なかったという動揺。

同じ動揺でもその種類は違い、動揺するベクトルも違った。

「おいおいおいオイッ！ 何故私達に攻撃するッ！？ 敵はあいつらだぞッ！？」

「君達の敵はあの人達かもしれないけど、僕の敵は紛れもなく君達だ。確かにこうして造ってくれたことには感謝するが、それ以上のことをする気は起きない」

「な、な……」

僕の言葉に狼狽する研究員達だが、それを無視して話しを進めていく。

「さて”紅き翼”の人達？ この人達はどうするの？ 僕としては殺そうが生かそうがどちらでも構わないんだけど」

「……一応捕まえる算段にはなっていますが、いいのですか？」

「何が？」

「あなたは一応あちら側でしょう？」

そんなことを聞いてくるが、その質問に対する解は先ほど述べたとおり。

「さっきも言ったけど、僕はあいつらの為に働くなんて嫌だよ。面倒なだけ」

「……そうですか。ナギ！ 彼らのことを任せます」
「おうよ！」

そう言つて、ナギ・スプリングフィールドと近衛詠春は残つていた研究員達を捕まえ始める。

多少の抵抗をするが相手は英雄。まったく歯が立たず、すぐに鎮圧された。

流星は英雄。

「それですけど、これからどうします？」

「どうする、とは？」

「あなたのこれからですよ。戸籍もなく誰に頼る事も出来ず、それ以上に人間ではない。これだけの要因が重なれば生きていくことから困難な世の中ですよ？」

「……戸籍はなくても拳闘場でお金を稼げるから問題はないと思うけど」

「確かにあなたほどの実力があれば問題ないでしょう。しかし見た目が子供のあなたでは受付すら通してくれませんよ」

「……ならどこかで年齢偽装の薬でも拝借するよ。それで問題はないでしょ？」

「それは犯罪です。そこで一つ提案があるのですが」

そう言つて、眼の前のアルビレオ・イマは近衛詠春を手招きしてこちらに呼び寄せる。

研究員の方は粗方捕縛も終了し、今はナギ・スプリングフィールドがその上でドツカリと腰を下していた。

何事かと思ひながら近づいてきた近衛詠春に、アルビレオ・イマは超弩級の爆弾を落とした。

「詠春、あなたこの間子供生まれましたよね？ ついでにこの子も引きとつてくれませんか？」

「は……？」

「この子は造られた生命ですが、そこに悪も感じられませんし。確かに先ほど研究員を殺しましたが、殺す＝悪という方程式を掲げるならば、私達も悪ということになってしまいますしね」

「待つて、話しかが面白いでしょ？」

「それに力も申し分ない。この子なら彼女、確か木乃香ちゃんと言いましたっけ？ その子を守る人材にもなれると思いますし」

もう既に僕の方は話についていけない。

勝手に話が進められ、僕の言葉は完全にスルー。ここまで綺麗に無視されるのも久方ぶりの感覚だ。

「……確かにそれも一利あるな」

「待つて。そこは納得したら駄目な場面でしょ？ よく考えて行動しないと後々面倒事に巻き込まれるのは自分達なんだよ？」

「そこまで私達のことを気にしてくれる時点で大丈夫だと思うんですけど」

「……そうだな。わかった、この子は俺が引き取ろう」

そうして勝手に解決されることになる。

本当に僕の話の聞かない人達だな。英雄つて皆が皆こんなものな

んだろうか。

「そう言えば、あなたの名前は？」

「名前……」

その言葉に、生前の名前を答えそうになる。

しかし、それはもうこの世界とは関係なく、既に失われた名前だ。今この世界で使うべきではない。

仕方なく、僕には名前がない旨を伝える。

「そうなんですか。なら、詠春、あなたが名付けて上げてはどうでしょうか。これから彼の親代わりになるんですから」

「そんな簡単に決めてものなのか？」

「別にいいんじゃないでしょうか。ねえ？」

「……はあ、別に構わないよ」

「なら」

そう言って詠春は僕に名前をくれた。

「雪華。髪が雪花のように綺麗だから雪華だ」

「……雪華」

「いいですね。それでは苗字はどうします？ あなたと同じでも構わないでしょうし、戸籍を一つ新たに作ることで造作のないことでしょうか？」

「苗字か……、そうだな、聖というのはどうだろう」

「聖？ それは僕に似合わないんじゃないかな。人を殺めたというのに”聖”というのはどうかと思うけど」

「別にいいんじゃないでしょうか。それに君には似合っていると思いますよ、聖という言葉は」

クスクスと笑うアルビレオに対して、僕はもう何も言わなかった。会ってからまだ一時間も経っていないが、こういう性格だということとは理解出来た。

なのでもう反論も起きる気もしない。

「それではあなたの名前は聖雪華。後の事は頼みますよ、詠春？」
「わかってる。それじゃ行こうか。目指す場所は俺の家だ。娘もいるんだが」

そうして僕は詠春の家に厄介になることになった。

そう言えば、結局ナギ・スプリングフィールドは影薄かったな。

2・親馬鹿とはこのことか……

そう言えば、こうして誰かと触れ合うのも久しぶりだな。

僕こと聖雪華は大戦の英雄”サムライマスター”近衛詠春に連れられ、詠春の実家にやって来た時にそう思った。

前世では誰もが自分を忌み嫌い、そして排斥しようとした。しかし自分の祖父だけはそうはせず、逆に自分を愛してくれた。そう考えると、祖父と詠春はどこか似ているような気がしてくる。

こんな僕に気を使ってくれるところ。

槍術と剣術と違いはあるが、武術を極めているところ。

そしてなにより、詠春が浮かべる笑顔がどうしても祖父と被ってしまうところ。

自分を助けてくれた人に違う人を被せることは侮辱でしかないだろう。

しかし、どうしても祖父の顔が浮かんでしまう。

でも、それも最初だけだろう。こうして数日と過ごしていたからわかったこともある。

確かに詠春は祖父に似ているかもしれない。しかし、やはり違うところも沢山存在する。

例えば、詠春は風呂に入ることが好きなようだが、祖父は鴉の行水だった。

例えば、祖父は厳しい人だったが、詠春はどこか甘さが残っているようだった。

確かに二人は似ているかもしれないが、二人ともやはり違った存在であるのだ。

「どうかしたのか、雪華？」

「いや、何でもないよ。それで、君の娘というのは？」

現在は、日本の三重のあたりの旅館で二人宿を取っている。

明日明後日には詠春の実家に辿り着くことが出来るだろう。

こうしてこの世界の情報を集めてみるが、やはり前世とは少し違ったところもあるが、大筋としてほど一緒だった。

これが俗に言う平行世界というものののだろうか。

そう言えば、パラレルワールドと並行世界の違いって何なんだろう？ あ、英語が日本語の違いか。

「木乃香のことか？ まず木乃香は可愛くてな。あ、写真見るか？ 本当に可愛くて眼に入れても痛くない存在なんだ」

「……そういうのは実際に会うからいいよ。それよりも、だ。彼女の立ち位置とかを教えて欲しいんだ。アルが零した言葉の中に、僕に”守ってほしい”存在なんだろう？」

「……ああ。まず木乃香は私の娘だが、世間、いやそういう世界の人間から見れば”サムライマスター”近衛詠春の娘ということになるんだ」

惚けていた詠春は、その言葉を受けた瞬間に雰囲気を変え、今では英雄の名に恥じない佇まいを見せていた。

「それは理解出来る」

「そして現在、この日本では西と東の魔法使いが対立しているのは知っているか？」

そう問われて、僕は頭の中に存在する情報に検索をかける。

これにも随分と慣れたもので、今ではこうして検索にかけること

や、暇があれば情報を整理したりなども出来るようになった。

沈黙の間一秒、その刹那の間に僕は情報を探しだし、そしてその内容を流し見ることが出来た。

「関西呪術協会と関東魔法協会の対立だね？ 正直、部外者の立ち位置から言わせてもらえば馬鹿の一言に尽きるな」

「これは手厳しい。まあそれは今は置いておくにして、そうすると木乃香はともわかりやすい旗印になるんだ」

「……そうだね。なんたって英雄の娘というネームバリューがあるから」

「ああ、だがそれだけならまだ問題も少なかったのかもしれない。しかし木乃香はそれ以上に厄介な問題を抱えていたんだ」

「問題？」

詠春の顔には苦悩が塗れている。

それは娘を愛する気持ちと関西呪術協会の長という使命感が闘ぎ合っている顔だ。

「木乃香には生まれ持つての魔法量が膨大だったんだ。それはあのナギを超えるほどに」

「……それは驚いた。まさか”サウザンドマスター”以上の魔法量とは。それだとこの日本では最大ということかな？」

「ああ。日本どころか極東最高だよ」

「なるほど。それも合わせて木乃香は狙われているんだね。関西呪術協会はおるか、世界各地に存在する魔術組織に」

「そうだ」

これは思った以上に面倒な事態になっているようだね。

「その相手を僕にしてほしい、そういうこと？」

「……ああ。出来れば雪華みたいな子供に頼むことじゃないんだが、人手が、な」

「別にそれは気にしてないよ。僕みたいな人間を引きとってくれるっていうんだから、それくらいは働くけど」

けどそれには少し問題がある。

「まず一つ、僕がどこまで動けるかわからないから、少し時間が必要だ」

今は前世と違って身体が小さくなっているから、その分槍の範囲とかを改めて理解しないといけない。

筋力面なんかは前世以上にあるらしく、そこはあまり問題はなさそうだし、身体もイメージ通りに動くからそれだけだ。

「それは大丈夫だ。今はまだ木乃香も自由に動き回れるような年齢じゃないから、後1、2年の時間はある」

「そう？　ならその間にどれくらい出来るかの確認とかをすればいいつか」

1、2年もあるのなら、僕の槍の腕も取り戻せるだろうしね。

ついでにこの世界の気というものを詠春に教わろう。情報を見るに、これが出来るのと出来ないのでは思いきり戦力に差が出るようだ。

魔法に関しては独学しか無理かな。詠春の実家は関西呪術協会の総本山だから毛嫌いする西洋魔術に詳しい人間なんていないだろうし、もしいたとしても排斥されているのがオチだろう。

しかし、僕の頭の中には魔法に関することはインプットされているようだから、使うことに関しては問題もないだろう。

思った以上にこの身体がハイスペックらしい。流石は自称究極の

生命体だな。

そう言えば識別名称が”サタン”って言っていたし、何か僕を造り出す時に悪魔の心臓を使ったらしいけど、もしかすると本当に”サタン”という悪魔の心臓を使ったのかもしれない。いや、それはないか。いくらなんでも魔神とまで称される悪魔を殺し切れる筈もないだろう、多分。

「なら、もう一つなんだけど」

もう一つ気になっていることを詠春に尋ねる。

「何だ？」

「その木乃香には勿論のこと裏の世界については教えるよね？」

「……」

あれ？　ここで沈黙するの？

「もしかして教えないつもり？」

「……ああ」

「それがどれだけ危険なことかもわかってるよね？　下手したら僕みたいに実験動物扱いされるんだよ？」

「……だがッ！」

「確かに親心についてはそれが正解だろうね。けど、もしそのせいで木乃香が傷ついたらどうするのさ？　いや、傷つくくらいならまだマシだね。もし取り返しのつかないことにでもなったりしたら？　僕達は絶対の存在じゃないんだよ？　たかだか一個人だ。それだけの存在が全てを絶対的に守れるとも思っているの？」

「……」

「後一つ聞くけど、詠春の奥さんはどう言ってるの？」

「……雪華と同じ意見だよ」

「ならそうしておく方がいいと思うよ。流石に両親二人がそう言うんなら僕も引いたかもしれないけど、奥さんもそう言ってるならそうであるべきだよ。女っていうのは大抵男よりも強い生き物だからね。それにだよ、もし教えなかったとして、途中でバレたら？ そうなったら多分だけど、木乃香は詠春のことを嫌うかもしれないよ？」「パパなんて大嫌いだッ！」なんて言って」

「……ガフッ」

どうやら今の光景が一番ダメージを受けたらしい。
詠春は倒れ、物言わぬ屍と成り果ててしまった。

「はぁ……」

僕は溜息を吐きながら、詠春を布団の上に転ばした。

「親馬鹿っていうのは詠春みたいな人を言っただろうね」

苦笑しながら、未だに唸っている詠春を尻目に見て、僕は備え付けられているお茶を飲む。

ポットのお湯は熱湯が入れられているらしく、お茶を入れると湯気が大変湧いて出る。

若干の猫舌気味の僕だが、そのお茶はおいしく頂く事が出来た。

「これからは波乱万丈の生活になりそうだな」

これからの生活を思い馳せながら、僕は考えた。
折角新たな生を受けたんだ。それなりに幸せになりたい。
それにこんな僕を拾ってくれた詠春には恩がある。勿論、それは木乃香っていう子を守ることで返す予定だけど、それでも僕は詠春にも幸せになってもraitai。

まあ守りたいものは全力で守って、敵対する存在は全て屠ろう。
それが僕であり、僕である存在の証だろうから。

「今はゆっくりと考えていこうかな」

3・出会い（前書き）

前話と同じ内容じゃねえかWWW
修正します。

3・出会い

「ふっ……」

詠春の実家にやって来てから早4年。

今では立派に僕もこの一員となり、また木乃香を守る守護者にも成った。

初めてここに訪れた時の感想は極めて単純で、ただ口を開け放心することしか出来なかった。

まさか夫が急に連れてきた身分も戸籍も何もないただの子供に対して「これから私があなたの母です」という存在を初めて目の当たりにした。勿論、その光景を見た周りの人物達も驚き、そして考え直すように説得したが詠春の妻　春香は意見を全く曲げなかった。そのおかげで、僕は早い段階からこの近衛家に馴染むことが出来た。

その後、初めて木乃香との対面。

今はまだ2歳にも成っていないらしく、立つことすらままならず、話すこともあまり出来ない。しかし、彼女が浮かべる笑みは本物であり、僕の中にあるナニカを感じとったことは本当のことである。

それから木乃香に自己紹介をし、しばらく一緒に遊んだ。

そのおかげか、初めて話した言葉が”ゆうくん”であり、そのことで大層詠春は悲しみ、また春香はあらあらと言った感じで僕を見つめていた。

ここで疑問に思うだろうが、何故僕が”ゆうくん”と呼ばれているかについてだ。

それは簡単で、どうやら彼女の口では”せつか”と発音するのが難しかったようだ。それを見た春香が「なら雪ちゃんとも呼んで

あげなさい」と言ったのが始まり。

それから木乃香は一生懸命僕の名前を呼ぶ練習をし、遂には”ゆーくん”と発音することが出来るようになった。

閑話休題。

そんなこんなもあり、次に僕がしたことと言えば、詠春に頼みこんで氣の使用法を教えて貰うことだった。

確かに情報の中には氣の使用法も書いてあったのだが、やはり一番効率の良い方法は現役の人間に教えて貰うことだろう。

それと同時に槍も用意して貰った。

詠春らが扱う流派、神鳴流は主に太刀を扱う流派なので僕には難しいが、氣の運用方法などは勉強になる。その為、僕は神鳴流の門を叩き、それ以来門弟と一緒に頑張って鍛錬に励んでいる。

やはりと言うべきか、この身体はハイスpekであり、一のことでも十を学び、挙げ句の果てにそれを百にまで利用するという、まさしく究極の生命体に相応しいものだった。

そのおかげで、氣の使用法も門を叩いてから一年もあれば会得し、今では詠春などの神鳴流の中でも最強クラスでしか僕には太刀打ちできないようになった。

槍の腕前も、氣の鍛錬と同時に鍛錬を開始し、そして今では生前以上の鋭さを得ること成功している。

また皆がいらないところでは、密かに魔法の訓練も怠らず、一応中位クラスの魔法までなら無詠唱で発動することにも成功した。

詠唱すれば勿論高位や最上級まで発動出来るのだが、あれらはもはや戦術級の魔法なので、むやみやたらに発動すれば僕が西洋の魔法を使っていることがバレるので、今は断念。

その為、現状では結界などの魔法を作成中。これさえ創ることが出来たら、周りの眼を気にせず鍛錬に集中することが出来る。

それに僕の中の気と魔力は膨大で、あまり本気になりすぎると周りにも被害が出るので、本気になることも出来ない。

その為、出来るだけ早くにこの魔法を完成させることが今の目標でもある。

「ゆーく〜ん、そろそろ朝餉の時間やえ」

「ん、いつもありがと。木乃香」

「気にせんでええって」

朝の鍛錬を終えると同時に、いつも通り木乃香が僕を呼びに来る。これは最早一種の生活リズムとなり、これがあるからこそ今日の一日が始めることを頭が理解出来る。

「刹那は？」

「せっちゃんはお父さんと鍛錬して、さっき帰ってきたところ」

刹那とは詠春が僕と同じように拾ってきた子の名前であり、本名は桜咲刹那。

初めて見た時は驚いたが、彼女は鳥族とのハーフ、それも最高位の鳥族との間に生まれた子であり、その身に宿す気と才能は高い。

しかし、それもあり、またハーフというものはどこでも忌避されるもので、彼女の父と母はその仲間であつた鳥族に殺され、そこを詠春が助けて連れて帰って来たらしい。

来た当初は誰も寄せ付けない抜き身の刀のような印象だったが、僕と木乃香が根気よく構い、数か月もすると心を開いてくれるようになった。

それから僕が槍の鍛錬をしているところを覗き見した刹那が同じように鍛錬をしたいと申し出、今では彼女も神鳴流の一員となったのである。

その才能は早くに開花し、今では門弟数人でも齒が立たないほど

の強さらしい。それでも僕には届がなく、日々僕に追いつくことが目標だと言っている。

「それじゃ僕達も行くのか。そう言えば、今日の昼からは魔法を教えるんだっかね」

「うんっ！」

また、木乃香には4歳の頃に裏の事情を全て話した。

その場に居たのは僕と詠春と春香の三人。始めは何のことか理解していなかった木乃香であったが、子供にしては頭の回る方で、数十分説明するとそのことを理解し、そして泣き出した。

どうしてうちにはそんなものがあるのか、と。どうしてうちが命を狙われなければならないのか、と。

泣きながら二人のことを罵倒し、二人は唇を強く噛みながら堪えていた。

そんな中、僕は、

「確かにそれは辛いことかもしれない。だが、木乃香だけ辛い目にあっている訳じゃないんだ。勿論僕だって同じようなもの。知っているかい？ 僕には両親はいなくて、母と呼べる存在は成体ポッドで、父と呼べる存在は気の狂った研究者だった。それを踏まえて聞こう。木乃香は不幸な子供かい？」

正直子供に聞かせる内容ではなかったが、自分だけが不幸だと言っている人間ほど腹の立つ存在はいない。だから僕はそう木乃香に話した。

僕は自分が不幸だとは思っていない。一度”死”を経験したといふのに、もう一度”生”を謳歌出来るとは思っても居なかったし、前世では愛情を注いでくれる人物は一人しかいなかったが、今では何人もの人が僕に愛情を注いでくれる。勿論、その中の大半が僕の

出生などを知らない人達だが、詠春や春香はそれを知ってなお僕を愛してくれる。

それだというのに不幸と嘆いたら、それは二人に対する侮辱だ。

僕の独白を聞いた木乃香は泣きやみ、そしてもう一度泣いた。

その理由がわからずオロオロしていたら木乃香は呪詛のように「ごめん、ごめんなあ」と繰り返した。

気にしないよと返し、泣きやむまで頭を撫で、そして眠りについたお姫様。

その日はそれで終わり、次の日、木乃香は僕にもう一度謝り、そして前を向いた。

「うちはもう逃げへんよ」

そう言つて、木乃香は力を手にすることを決意した。

勿論、元々僕は木乃香の守護者になる予定だったので、木乃香には防御面、それも僕が辿り着くまで耐えきれただけの力を最優先に手に入れて貰うことになった。

それ故に、まず最初に手を出したのが陰陽術。

元々、神鳴流には陰陽術を使う術も持っており、詠春も少しながら扱えたし、詠春の信頼出来る部下の中には陰陽術のエキスパートも存在した。

陰陽術の中には式神という有名な術があり、まずこれを会得しようとのことから始まり、今では関西屈指の陰陽術士とまではいえないが、その才能を発揮し、近い将来にはそう呼ばれる程まで成長した。

その他にも治療関係にも手を出しており、元々の相性がよかったのか、治療関係は陰陽術より群を抜いて才能が光った。

それを見た僕が詠春達と相談して木乃香に西洋の魔法を教え始めたのだ。勿論、僕独自のものなので、一般とはかけ離れたものにな

っているが、それでも木乃香はしっかりと学んでおり、師としては花が高い。

「さ、行こうか」

最近では何故か過度なスキンシップを取ることが多くなった木乃香、そしてそれに対抗するかのような刹那。

どこかおかしな気もするが、毎日を楽しく過ごす僕達にとって、それは些細な問題にしかならなかった。

4・流れる月日

「魔法の射手 連弾 51矢」！」

才能とは宝石の原石だと聞いたことがある。

磨けば磨くほど、その美しさは増し価値は高くなる。しかし、間違った磨き方をすればその価値は衰える。

故に才能という宝石を磨きあげるのならば、それだけ慎重になる他ない。

「いい感じだね。正直この魔法は初級の魔法だけど、これを極めるだけでも攻撃の手段に成りえるから頑張ろうか」

「はいな、お師匠っ！」

今は三日に一回の木乃香の魔法特訓。

この時間だけ木乃香は僕のことを師匠と呼ぶ。最初は戸惑い普通に呼んで欲しいと抗議したが聞き入れてもらえず、結局こちらが折れることになった。

しかし、やはりというべきか、木乃香の才能は凄い。

東の陰陽術を操りながら西の魔法まで使いこなすその才能は、本当に凄いの一言でしかない。

また、その才能は留まる事を知らず、親譲りなのか、氣にも才能を持ち合わせていて、僕や刹那みたいに神鳴流なんかは出来ないが、合気道などの守の武術を習っている。

まさに天才の名に相応しい存在だろう。

僕もそれに当てはまるだろうが、僕の場合は造られた生命なので、今は除外しておく。

「攻防のバランスもいいし、治癒の補助も完璧になりつつあるね。」

もしかしたら僕や刹那はいらないかも……」

「それはないでっ！　うちには師匠もせっちゃんも両方必要やえ？」

「……ふふっ、ありがとう。それじゃ次、いこうか」

「はいっ！」

それから二時間ほど鍛錬を続け、そろそろ空が紅く彩られてくる頃に鍛錬を終えた。

木乃香は近くにあった木の幹に腰下し、持って来ていた水を飲み干して行く。

魔法の訓練は思った以上に体力と精神力を使うので、身体が作り終えていない現在は無茶は出来ない。

「お疲れ様」

「ゆーくんもお疲れ様や」

僕も木乃香の隣に腰を下す。

すると木乃香は僕に凭れかかるような姿勢になり、体重が全てこちらにかかる。

「ほら、ちゃんと座る」

「いやー」

キャツキヤと笑う木乃香の笑みは大層癒され、日々の疲れが吹き飛んでいく。

刹那も同じような感じで、二人でいる時はいつもこんな感じだ。

「あ、ゆーくん！　それにこのちゃんも」

「あ、せっちゃん！」

すると草影からひよこつと顔を出したのは刹那だった。

前々からそこには何かいることは知っていたし、その雰囲気は刹那であることも知っていた僕は特に驚かずに対処する。

軽く流して、刹那もこちらに座るように目線で合図。

すると刹那も木乃香と同じようにこちらに凭れかかりながら腰を下した。

「暑いし重いんだけど」

「こら。女の子に重いなんて言葉は使ったらいけないよ?」

「そうやえ、ゆーくん?」

「あーごめんごめん」

こうして穏やかな日々は流れていく。

穏やかな日々があれば、それは激動の日々もあるということ。

「人斬り? 神鳴流の門弟の中に闇に堕ちた人間がいるの?」

「いや、そうでもないらしいが……」

今朝行き成り詠春がそのようなことを僕に言い放った。

どうやら神鳴流の門弟の一人が同じ門弟を斬りかかったらしい。

傷の方はそこまで深くはなく、一カ月もすれば完全に回復するらしい。

その話を聞いた時、ただ力に魅入られたのかと思ったが、どうやら違うらしい。

詠春は口を閉ざして語らず、僕は何かアクションを起こされるまで待つしかない。

「月詠……」

「ん?」

「それが人斬りの正体で、その人物は今、関西呪術協会の独房に入られています」

「それで、僕にどうしろと？」

「一度会ってきてくれませんか？ それ以降の行動は別に何をしても構いません。ですの」

「……わかったよ。詠春には返しきれない恩があるから。あ、なら木乃香と刹那にはちゃんと説明しておいてね。何も言わずにどこか行ったら、すぐ二人とも機嫌が悪くなるから」

「わかっていますよ」

苦笑しながら詠春は頷く。

なら早速その場所に向かおうかな。

「ここかな？」

受付を通って地下に降りていく。

現在ここの独房に入っているのは件の月詠と呼ばれる人物のみらしい。

カッソカッソと響く地下は湿った空気が流れ、僕として一日たりとも過ごしたいとは思えない場所だった。

「4番……何で誰もいないのに、こんな縁起の悪い番号に入れたるんだろ？」

一つ一つの番号を確認しながらその独房を探して行く。

1、2、3と続き、どうやら次が目的の4番らしい。

「へえ……」

「こんなところに来るなんて珍しいお人ですな」

それは僕が想像していたものの斜め上を走る人物がそこに佇んでいた。

どう見ても木乃香や刹那程度の年齢しかない少女がその牢の中に入れられている。

まさかこんな子供が人斬りだったとは思ってもいなかった。

「君が噂の人斬りかな？」

「どんな噂かは知りませんが、多分そうやないかな？」

「ふうん……。でも、何で人斬りなんかするの？」

「それはやな」

一度俯く月詠。

そしてもう一度顔を上げた瞬間、纏っていた雰囲気ガラリと姿を変える。

「どうしても身体が疼くんや。誰かと殺し合いたい（アイシアイタイ）って」

「……」

どうやら人を殺すのが好きな訳じゃなく、天性の殺人衝動の持ち主か。

しかしどうしようかな。詠春はどうしても構わないって言うけど。

「ねえ……」

「何や？」

「君は外に出たい？」

「うゝん、どっちでもいいなあ」

「何で？」

「うちはどっちかっていうと、外に出るよりも殺し合いたい（アイシアイタイ）し」

「……なら僕と一緒に来る？ もし僕の言うこと ほとんどがある人の護衛だけど を聞いてくれるのなら外にも出してあげるし、君の言う死合にも僕が付き合ってあげるけど」

「あんさんが？」

「うん。ちなみにだけど、僕の名前は聖雪華。神鳴流にいたんなら聞いたことくらいあるんじゃない？」

「あなたがあの聖雪華なん？」

「そうだよ。それで、どうする？」

「……」

悩むそぶりを見せる月詠だけど、多分その答えは決まってるんだろつ。

「……その条件、飲むわ」

「そう？ ならこれからよろしく」

「よろしゅう。一応知ってると思うけど、うちの名前は月詠いいます」

そうして僕は一旦家に戻り、詠春に話を付ける。結果、月詠の罪は赦され、月詠も詠春の家に住むことになった。

「”にとーれんげきざんがんけーんつ”！」

「中々……」

迫りくる二本の凶刃を一本の槍で巧みに反らす。
その反動を利用して、身体を半回転。反動と回転により加えられ

た力は、腕の振りも相まって二乗三乗の力に変化する。

槍という武器は種類によっても異なるが、突けば槍、払えば薙刀、振れば太刀と、あらゆる状況に対応出来る武器である。

故に熟練した槍使いというのはそれだけで恐怖となる。

「ええわ、ここまで血が滾る戦いは初めてやわ」

「僕も命が掛かる対人の戦いは初めてだからいい練習になるよ」

薙ぎ払った槍はしゃがんで避けられ、そのまま跳躍。

未だ月詠は虚空瞬動を身に付けていないのか、宙では木々に足を付けて方向を変化させる。

僕の場合は瞬動は勿論のこと、虚空瞬動、縮地无疆と色々な基本的移動術は身につけているし、僕独自に作り上げた歩法も数点存在する。

「ほんまこの選択を選んで正解でしたわ。お嬢様も才能溢れる御人ですし、先輩も剣の才能を持つとる。それ以上にお兄さんのその殺気、これが一番心地ええですわ」

「僕としては木乃香とも刹那とも仲良くしてるのが驚きだったけどね」

「まあ初めは斬り合いたかったんやけど、まだ先輩の方は熟してないようやし。かといってお嬢様はどこかやる気を削がれるっていうか……」

「それはわかるよ。木乃香っているだけで他人を癒す存在だし」

話し合う間も、二人は切り結ぶ。切り結ぶと言っても片方は槍だが。

それにしても、この子は本当に木乃香達と同年代なんだろうか。まずこの太刀筋。明らかに全てが僕の急所を狙っている。間違はなくこの子も天賦の才能の持ち主だ。というか、僕の近場にいる人

全てが才能に溢れてるってどうなんだろう。

まあ、木乃香が本当の意味での天才で、刹那が何かを守る為の天才、そして眼の前の月詠が人を殺す天才とでもいうか。

僕の場合はどうなるんだろうね。

「それじゃ今日はそろそろ終わりにするよ」

「そんなんややわ。もっと踊りまひよ？」

「それなら頑張って耐えることだね ”時雨”」

相手の真上 つまり制空権を取った上での強襲。

人間は前から来るものには反応出来るが、横や上といった方向から来るものには反応しにくい作りとなっている。

その真上を取り、僕の槍は幾重にもわかれたよう突きを放つ。

普通の人間ならば、一度飛ぶと空中で身動きが取れずに振りになるが、僕の場合は空中でも行動が可能なため振りにはならず、こうして有利に働くのだ。

カラン……

「……参りましたあ」

「お疲れ様。それじゃ家に戻ろっか」

「今日のところはそうしときます」

5・麻帆良学園

「最近、関西呪術協会は勿論のこと、他の魔術組織の動きがキナ臭くなり始めました。どうも木乃香を旗印にするどころか、その力も狙っているようです」

「……鍛えとも鍛えずともどちらも結局は同じ、ということだったわけだ」

「それでも無駄というわけではありません。というわけであなた達四人には私の義父である近衛近右衛門が学園長を務めている麻帆良学園に君達は転入してもらいます」

「そのことを木乃香達は？」

「もう伝えていますし、それについての了承も貰っています。あちらは東の総本山ですから、魔法についても今以上に鍛錬に励める筈です」

「その間に膿を吐きだすと」

「ええ、その予定です」

こうして僕達四人は麻帆良学園に転入することになった。

勿論クラスは全員一緒になっており、護衛に関しては問題がなさそうだった。

「麻帆良学園……ねえ」

詠春が運転する車に揺られながら、これからのことを思い馳せる。話を聞く限り、僕は小学校に通わないといけないようだ。一応、前世では大学まで出ているし、なによりもこの身体はハイスペックなので大抵の勉強はどうにでもなってしまう。

だからどうしても行く気はあまり起きない。唯一、木乃香達と登校出来ることだけが救いだ。

木乃香は見た目通りこの年齢にしてら十分の知識を持っているし、人斬りの月詠も予想以上の頭の良さを誇る。反面、何故か刹那は勉強を苦手としており、家にいた時はよく勉強を見てやっていた。

「そう言えば、詠春。その学園では何かの仕事があるんだって？」

「ええ。主に学園の護衛ですね。あそこは貴重な魔導書や世界樹と呼ばれる霊樹があり、裏の人間からすれば宝の宝庫ですから」

「そんな所に木乃香を放り込むの？」

「その分守りも堅いですからね。話を付けた限りでは、木乃香を除く三人にはその仕事割り当てられています。勿論、それに関する報酬もあるので、軽い仕事感覚で大丈夫でしょう。あちらでの仕事とあまり変わらない筈ですしね」

元々、裏の仕事は木乃香を除いた僕達三人の仕事だった。

実家にいる時もよく木乃香を狙う不屈き者の捕縛、または殲滅をよくやっていた。その度に月詠にストップをかけていたのはいい思い出だ。

あまり人を殺すことをよしとしない刹那がいたので、刹那がいる所では滅多に殺すことなんてしなかったし、僕が殺す時は本当に木乃香に危険が及ぶ場合のみだけだ。

そのことに関しては木乃香も刹那も両方とも納得している。ただ、やはり甘さが残っているのは仕方のないことだ。

僕や月詠みたいに割り切っている方が異常なのだ。

それを踏まえて、現在は全員が9歳という設定。

僕が木乃香達と同じ年代というのは可笑しな話しなのだが、護衛という立場もあるし、このくらいの年齢幅なら少しくらい偽装しても問題はない。

それにしてもこの集団、9歳という低年齢の集まりの癖に戦力が凄いいことになっている。

例えば刹那。彼女は普段はその力を封印しているが、それを開放し翼を出現させることでその強さは本国AAクラスまで登りつめる。神鳴流の方も式の太刀という、神鳴流の宗家青山家ゆかりの者にしか伝承されないとまで呼ばれる秘奥までもその状態になら撃てるという非常識ぶり。

それを超えるのが月詠であり、彼女の場合、練習などという場面においては刹那に一步劣るが、こと実戦、それも互いの命を賭けて戦う殺し合いの場に置いては刹那をも上回り、その剣筋は恐怖の根源となる。彼女の場合、殺し合いの場なら難なく式の太刀を撃つてくるといふ刹那以上のバグっぷり。

そしてその二人には戦闘力ならば劣るかもしれないが、有用度では木乃香の方が断然に高い。まずその持ち前の魔力と気。これだけで下位の鬼などは滅することが出来、今では西屈指の陰陽術士とまで呼ばれ、彼女が使役する式神はかつて天才陰陽術士、安倍晴明が使役したとされる十二神将を使役する。未だその中でも”六合”のみしか使役することが出来ないが、研鑽を積みば全員を使役することも可能だろう。というより、もし全員を使役することが出来れば、間違いなく僕達の護衛は必要なくなる。

”六合”だけでも正直反則臭い。まだ僕は倒すことが出来たが、刹那や月詠じゃキツいってレベルだったし。

それに加え、彼女が最も得意とする治癒術。時間さえ掛ければ、今でもほとんどの外傷を治すことが出来ると、まさに天才の一言に尽きる。

これだけのことを並べれば接近戦は弱いと思うかもしれないが、それも間違いである。

もし木乃香の懐に入ること成功しようとも、すぐに合気道により力を流され、その力を利用し飛ばし、魔法などで殲滅されるのはオチだ。

誰を一番相手にしたくないかと聞かれれば、間違いなくそれは木乃香を選ぶだろう。

そして最後に僕だが、僕の場合は特に大きな変化はなかったように思われる。

ただ前々から持っていた力や技術に磨きをかけ、それをまた活用する術を考えていただけだ。

まあ戦闘力で言うのなら、最近衰え始めてきた詠春から一本取れるようになってきたことだろうか。死合なら僕が勝つだろうが、そういう技術面ではまだ詠春を抜く事は難しいらしい。

なので、最近では出稽古という名で神鳴流最強とまで呼ばれている青山姉妹のところについて死合ことが多かった。

にしてもやはり最強の名に驕りはなかった。あの二人と殺り合えば、十回中二、三回しか価値を拾えないほどの差がそこには存在した。

どんな攻撃も紙一重で避け、槍以上に鋭い斬撃をこれでもかと放ってくる。

最後にやった死合では決戦奥義を放たれて、少し三途の川を渡りそうにもなった。

「着きました。ここが麻帆良学園です」

外を眺めると、そこには広大な敷地に広がる巨大な学園、いや街が存在した。

その言葉に後ろに乗っていた三人も反応し、キャツキャと騒ぎ立てる。

それにしてもこの学園、中々強固な結界が張っていることがここ

からでも窺える。種類としては害悪の侵入を拒むものと強制認識阻害それに……何かの封印？ 多分だが、その三つ主らしい。

結構高度な魔法術式なので、それなりの魔法使いがこの学園には存在するのだろう。

「迎えが来る予定なのですが　　っと、来ましたね」

詠春が見据えた先には、青年と壮年の間くらいの年齢の男性がこちらに向かって歩いてくる。

手には煙草を持ち、眼鏡を掛けていた。

その姿をどこかで見たことがあると思った僕はすぐに情報を検索し始める。

” 紅き翼 ”

その言葉がヒットされ、そう言えばこの間調べた情報の中に存在した人物だということ思い出す。

確か名前がタカミチ・Ｔ・高畑。現在はＮＧＯ団体” 悠久の風 ” に所属する著名人。

特に彼が扱う技法、究極技法 アルテム・アート と呼ばれる” 咸卦法 ” には少し興味がある。

この学園に滞在中にそれとなく聞いてみることにしよう。

「お久しぶりですね、詠春さん。それでこの子達が？」

「久しぶり、タカミチ君。ああ、年齢はまだ幼いけれど、強さなら私が保証するよ」

「そうですか」

少し詠春とは高畑と会話し、そしてこちらを向いた。

「初めまして、僕の名前はタカミチ・Ｔ・高畑。この学園で教師と広域指導員を担当しているよ」

「こちらこそ。僕の名前は聖雪華。それで」

「うちは近衛木乃香って言います。よろしゅう」

「えっと、桜咲刹那です」

「月詠言います」

「ははっ、僕のことは気軽にタカミチって呼んでくれて構わないから。それじゃ行こうか。詠春さん、お忙しいところ申し訳ありませんでした」

「いえ、気にしないでいいですよ。それよりもこの子たちのことは頼みます」

「……任せてください」

そうして詠春は再び車に乗り、実家へと戻っていった。

これからあちらでは忙しくなるだろう。何せ、今まで溜まりに溜まった組織の膿を吐き出させるのだから。

「それじゃあ付いてきてね」

こちらと同じように歩き始めた。

先頭をタカミチ。その後ろに僕が来て、右腕を木乃香、左腕を刹那、背中にしがみつくように月詠がへばりついて、正直歩き難いところの上ない。

「雪華君は人気者だね」

「……そうだね。好かれることは悪い事じゃないから」

「えへへ」

「あ、あう……」

「」

こんな奇妙な集団が街の中を闊歩すれば、当然のように目立つ。
しかし、周りから送られてくる視線は全て微笑ましい何かを見る
もののようだった。

5・麻帆良学園（後書き）

更新が滞って申し訳ない。

現状は期末試験という魔物と激闘を繰り広げている為、こちらも主作品の方も更新が滞るかと。

試験終了……いや、せめて週末にでも一本更新出来れば幸いかな？

6・力試し（前書き）

最近時間が全くない。

というのも、何故か欠点者課題を出されたからなんですけどね（笑）
別に私はそこまで馬鹿なんじゃないんですよ？　ただ中間も期末も
風邪で試験を休んだだけなんですorz

6・力試し

夜の帳が下りる中、僕達四人は指定された世界樹の下へと目指す。まだ19時と半分を過ぎた時間なのに、辺りには人の影は見えない。ここの住民はこんなに早い時間に家に戻るのか。それとも魔法が使われているのだろうか。

思考を展開しながら並列しこれからのことも思考する。

学園長が言うにはこの後に木乃香を除く僕達三人の紹介と力試しが待っているらしい。

どれくらいの猛者がいるのか……

「どうかしたん？」

「いや、何でもないよ」

流石は木乃香。

僕が少し纏っている雰囲気を変えた途端に気付いたか。

「どれくらい強いお人がいるんやろな。今から楽しみです」

「一応言っておくけど、殺しはなしだからね。勿論傷つけることも」
「わかってますえ」

本当にわかってくれるのか？

正直、月詠を満足させられる相手なんて、ここの学園長がタカミチくらいじゃないんじゃないのか？

多分学園長が戦闘するなんてありえないから、繰り上がってタカミチがここの学園最強と予測される。

「ま、あっちに着いたらわかることだね」

世界樹の麓まで辿り着くと、そこには既に人だかりが出来ていた。やはりと言うべきか、僕より強い人物はいなく、同等の存在にタカミチと学園長というところ。

これではタカミチが相手になってくれなければ瞬殺に終わるだろう。

「良く来たの。時間も守って感心感心」
「時間厳守は基本だよ」

先頭に僕、その後ろに木乃香が控え、刹那と月詠がその横に立つのが僕達のスタイル。全方向から木乃香を危機から守り対処する布陣。

ここではそんな心配もいらないだろうが、念には念を入れてこの布陣を展開させておく。

「それでは紹介しようかの。この三人 あ、木乃香は違うからの
がこれから一緒になってこの学園を守る仲間じゃ」

「聖雪華、よろしく」

「月詠言います」

「桜咲刹那です」

その紹介の反応は半々。

真面目に喜ぶ人もあれば、子供と侮っている人もいる。

僕の顔を知っている人間はタカミチの他に葛葉刀子などもいた。そう言えば、あの人は結婚して東の方に行ったとは聞いていたけど、まさかここで教師をしているとは。

「学園長っ！ こんな子供を戦線に出すのですかっ！？ 無茶です

っ！」

「ガンドルフィー二君、君の言うことも理解出来る。だから手合わせをし、その力を証明する。の？ 雪華君」

急に話しの矛先を変えてくる学園長。

「それはあなたが言ったことでしょうか？ で、相手はどなたがするんですか？ この居る人達ならタカミチ以外相手になりませんよ？」

「なっ！？ え、えっと、雪華君と言ったかね？」

「あなたはガンドルフィー二でよかったですか？ 何か御用でしょうか？」

「いや君が言うことがあまりにもおかしかったからね。君みたいな子供が私達に勝てる？ 冗談はよしてくれ。ここは真面目な場所なんだ。子供くるようなところじゃないんだよ。」

何故か見当違いなことを言ってくるガングロだが、僕は気にすることなく返す。

「はあ、学園長。僕達の情報は回していませんか？」

「ふお？ う、うむ。無用に個人情報の流出は避けようと思っ」

嘘を付け。

個人情報の流出なぞ全く気にしない癖に。

どうせ僕達の実力を実際に見せつけ、タカミチ以外の防波堤作りでも考えたのだろう。

「……まあいいです。ならここにいる全員対僕達三人で相手をしましょうか？ ねえ、葛葉？」

「……止めておきましょう、ガンドルフィー二先生。私達じゃ彼ら

に触れることすら出来ません」

「葛葉先生っ!？」

「彼らは現在神鳴流最強に最も近い存在達です。特に聖なんかは青山姉妹とすら互角の実力の持ち主です」

「あ、あの青山姉妹ですか？」

青褪めた表情でこちらを見るガンドルフィーニ。

勿論そんなことに気にはせず、僕は話しを進める為に会話に参加する。

「それでどうするんですか？ 文句があるのなら相手になりますけど」

「が、学園長っ!」

「スマンの、雪華君。君達の相手はタカミチ君にやって貰う予定じや。タカミチ君!」

「はい」

一歩前に出てきたのは、”紅き翼”所属の男。
やはり風格は他の教師などとは核が違い、纏う闘気は強者のそれ。

「儂達は下がるかの。木乃香もこっちに来るんじゃ」

「ん。頑張ってな」

「わかってるよ」

木乃香を一撫でし、学園長の下に渡す。

僕達から見物人達は百メートルほど離れた場所に立ち、そしてなお障壁などを立て、確固たる防御を組み立てる。

残った僕達はいつでも戦闘が始められるよう、得物を手に持つ。

「準備はいいかな？」

「僕はいつでも」

「うちもええよ」

「うちも」

「そうか。なら小手調べから行くよ」

その瞬間、戦闘は始まった。

ポケットの中に収められていた両腕が常人には捉えきれないほどの速度で外に出される。それに伴い射出される拳圧は無音で僕達に襲いかかった。

僕はそれを常時展開している障壁で防ぎ、月詠は手の持つ両刀で、刹那は純粹に回避を選ぶ。

タカミチはそれらの行動に呆気を取られながら、すぐにまた再起動を果たす。

僕は呆気にと取られていたその瞬間に物質転送アポートの魔法で自分の得物を出現される。

「各々好きに攻撃。連携は崩さないようにね」

「了解」

「うんっ」

今回は二人にも好きに行動させても問題はないだろう。

そろそろ二人には僕以外の強者と当たらせて経験を稼ぐ時期だ。

僕は妙子や素子としょっちゅう殺り合っていたからいいけど、二人はそういった経験は少ない。

なのでここいらで経験を積まうのがベスト。

「はあっ！」

「シッ！」

両脇からの同時連撃をタカミチは瞬動で避け切る。

僕は今回あまり手を出さないようにしようと思い、軽い魔法で支援することに。

後ろに跳躍したその着地地点を狙い魔法の射手を叩きこむ。直撃せずともそれなりにダメージが入れば儲けものということで放ったので、多分当たっていないだろう。

追撃をかけようとしていた二人だが、急に足を止める。何事かと思いそちらを見つめると、空気が変わった。

「まさかここまで出来るなんて思ってもいなかったよ」

「それは油断が招く慢心だよ」

「そうだね。だから 本気で行くよ」

遠く離れている僕にさえわかるほどの気。

それは少ない魔力と合成され、莫大な力を生み出す。

「究極技法 アルテマ・アート……」 咸卦法”か。刹那、月詠。

相手は本気だから気を引き締めてね」

「ゾクゾクするわ」

「はいっ！」

一人返答がおかしかったような気もしたが、まああれは月詠の持ち味だからいいだろう。

さて、あちらが本気になったら、多分まだ刹那と月詠じゃ勝てはしないだろう。精々追い詰めるのがいいところか。

才能なら間違いなく上回っているだろうが、まだ経験が足りていない。あらゆる戦場を巡ったタカミチに比べれば二人の錬度はまだまだ。

僕も経験だけなら負けているだろうけど、妙子達と殺り合った時間の密度は果てしなく濃いので、一対一で戦っても、十回中七、八回勝ちを拾えるだろう。

「雷鳴剣”ッ！」
「はぁッ！」

神鳴流の奥義である雷鳴剣を咸卦の気を纏った拳が相殺する。

その横から月詠が二刀を持って襲いかかるが、先ほどの居合拳を使い月詠の小さな身体を吹き飛ばす。幸い、ぶつかる瞬間にガードしているため、見た目よりダメージは少ない。

「調子はどう？」

「いい気分で興に乗って来たところですよ」

「あまりハイになって殺しにかからないでね」

「わかってますよ。本当お兄さんは心配性やわ」

「……君じゃなかったらここまで言わないよ」

聞こえない程度に呟く。

月詠は気にしていないのか聞こえていなかったのか、何のリアクションも取らずにまたタカミチの下に殺到する。

僕もそろそろ手を出していくとするかな。

「呼び声を受け姿を現し給へ 其は悠久の精霊 数多の自然を制する者なり 天をも凍らすその息吹 ここに顕現したまえ”冥界の凍風”！」

氷を伴う凍てつく風がタカミチに襲いかかる。

確かに咸卦法は発動するだけで肉体強化、加速、物理防御、魔法防御、鼓舞、耐熱、耐寒、耐毒、その他諸々と色々な効果を付加されるが、それにも限度というものがある。

いくら咸卦法でも上の下ほどの威力を伴う魔法を直撃ならばダメージは通る。まあバグじゃなければの話だが。

だが、相手も歴戦の勇士。

幾千もの戦場を魔法を使えないというハンデを背負い、そして打ち勝ってきた稀代の英雄。

魔法が飛来したその瞬間に判断を下し、瞬動を用いてその場から退避。刹那と月詠には前以て念話で伝えているので直撃する瞬間にその場から離れている。

「流石は麻帆羅学園最強の魔法教師なだけはあるね。三人掛かりでも仕留めきれないか」

「と言つても、君にはまだ手加減されているからだけだね？ 確かに刹那君と月詠君は年齢から考えれば大したものだ。しかし君は違う」

ファイティングポーズに移行。
それと同時に僕は二人に告げる。

「二人とも、退いてくれる？」

「ええ〜！？ こんな楽しい時間をもう止めなあかんの？」

「今度模擬戦やってあげるから。ね？」

「うゝ、わかりましたよゝ」

「刹那もいい？」

「あつ、うちは別にええよ？」

「なら二人とも木乃香のところに行つておいで」

話が纏まりしだい、僕は二人に転移魔法を発動し木乃香の真横に出現させた。

「何故二人を退かせたんだい？」

「二人じゃまだ貴方には勝てないから。それとあまり月詠が興奮す

ると本気で殺しに掛かりそうだからね。早めに退かせないと」
「そ、そうかい」

僕の言葉に些か顔が引き攣っている。
確かに先ほどまで相手していた人物が殺しに掛かるなんて言われ
たら少しは動揺もするか。

「さて
」

槍を構える。

ここからは真剣勝負。

「本気で行くよ？」

「っ……」

言葉はなく、ただ風が吹いた。
その瞬間、両者は激突した。

6・力試し（後書き）

出来れば今年までもう一本くらいはどちらかの作品で投稿したいけど、やっぱり年末は忙しいですね。

忘年会やら新年会、帰省など色々と時間を取られる用事が目白押し。もしかしたら次の投稿は来年になるかもしれませんが、出来るだけ早い投稿を出来るように心がけます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7751o/>

光を追い求める闇

2010年12月25日23時15分発行